

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書き、かたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 反乱の企てが露見する。
- (2) 時代の変化に翻弄される。
- (3) 法令を遵守する。
- (4) スポーツを奨励する。
- (5) 家屋のタイシヤク関係を結ぶ。
- (6) 新しい旅客機が国際線にシユウコウする。
- (7) 書式のテイサイを整える。
- (8) シンシヨウボウダイに言いふらす。

2

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(* 印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。)

篠崎凜は、勉強と弓道の練習に打ち込む高校一年生である。凜は中学一年から弓道を始め、中学三年で三段に合格したが、高校入学後、弓を引く際の技術について大きな課題を抱えていた。

更衣室を出ると、三年生が受験で引退した今、凜以外唯一の三段で新部長になった二年の本多陽子が立ち塞がるように待っていた。百七十七センチの長身で十六キロの強弓を引く彼女は、三段になったばかりではあるものの、的中率ではピカいちで、間違いなくこれからの翠星学園弓道部を引っ張っていく人材だということは、凜も認めざるをえない。ただ少し、その性格のきつさは誰もが眉をひそめるところで、必ずしも人望が厚いとは言えない。凜も中等部の時から知っているが、ほとんど私的な会話というものをしたことがないし、誰かと雑談しているのもあまり見たことがない。

「篠崎さん。」

「はい。」

自分より先に参段を受けて落ちたことで何かいやみでも言われるのかと身構えていると、思いもしない質問が飛んできた。

「あなた、棚橋先生のご自宅に通ってるの。」

「え？ あ、はい。土曜日だけ。」

(2) 凜が素直に答えると、部長はやれやれという様子で横を向いて舌打ちをする。

「あのね、先生は体調が悪いから辞められたの。分かってんの？ それを自宅にまで押しかけて……。」

「あ、いや、別に指導を受けてるわけじゃないんです。道場を使ってもいいっておっしゃっててもらえたので一人で引いてるだけで……。」

「どれだけ無神経なの！」

元々何かにつけてきつい言い方をする先輩ではあったが、この時ばかりは、帰り始めている部員も立ち止まって振り返るほどの怒声だった。凜もさすがにびくつとする。

「……無神経……ですか。」

「そうでしょ。先生はね、指導も含めて弓が大好きだったの。それが引けないってことがどういうことか分かる？」

「弓が引けないほど、悪いんですか？ なんかもそうは見えなくて……ちょっと悩みを聞いてもらいに行ったら、好きに使ってって言われて……。」

⁽³⁾色々と言いつつ、元々先生の体調が心配だったこともあるし、訪ねると嬉しそうに迎えてくれて「時々弦音を聞かないと寂しいから、好きに使ってね。」と言ってくれたこと、一度は辞退もしたこと……しかしそれも、やはり無神経と言われればそうなのかもと思いついた。当たるふしがあるだけに、強く言い返す気にもなれなかった。あわよくば、ちょっとしたアドバイスをもらえるのではないかと、学校とは違う環境で弓を引いてみたいという気も最初からあったからだ。他の部員（仲のいい綾乃にさえも）には黙って行っていたのも、少し後ろめたくはあった。しかし、自分は参段の審査を受けるのだから、それにふさわしい指導、練習があつてしかるべきだという、傲慢ごうまんと言われても仕方の

ない感情もあつたような気がする。自分にはその権利があるような気がしていた。

「先生は、優しいからそう言ってくれてるだけ。他のみんなまで行きたいって言い出したらどうなると思う？ とにかく、これ以上先生にご迷惑をかけないで。」

何だか癢しゆくで、心の中がもやもやとしたが、本多先輩の言ってることの方が正論だという気がした。自分のことしか考えていなかったことが、とにかく恥はにかずかしかつた。

「おっしゃる通りです。わたしが、無神経でした。——どうも、すみませんでしたっ！」

凜は勢いよく九十度に腰を折って頭を下げたので、ゴムで結んだ髪の毛がぐるりと回って自分の顔に当たるほどだった。

「わたしに謝つてもしょうがないでしょ。」

凜があまりに素直に頭を下げたせい、本多先輩はやや戸惑ったような表情で周囲に視線をやる。

「——それに、何か弓のことで悩みがあるなら、まず仲間や先輩に相談なさい。あなたより下手な人間しかいないから相談しても仕方ないと思ってるの。」

「いえ、そんな……。」

いや、そうだ。はつきりではないけど、どこかでそう思っていたのだろう。凜は自分の愚かさに歯がみしたい思いだった。

「すみませんっ！」

もう一度頭を下げ、そのまま続ける。

「他のことが、何も見えなくなっていました。以後気をつけます。」

「分かれはいいです。」

それだけ言って、本多先輩はすたすたと立ち去った。その背中を見送りながら、綾乃が顔を近づけて言う。

「なーにあれ。あんなにきつく言わなくてもいいじゃんね？」

「んー……わたしもちよつと苦手だったけど、結構いい人かもね？」

⁽⁴⁾ 凜がそう言うのと、綾乃は目を剥いた。

「え、何。なんでそうなの？」

「だって、『悩み事あったら相談しなさい』って言ってくれたし。」

「いやいやいやいや、そんな言い方じゃなかったよ？ ……じゃなかったと思うけど？」

「まあ、大体そんなだったよ。多分。」

何だかいつになくさっぱりとした気分であることに凜は気づいた。

ずっと審査へ向けて、早気^{はやけ}を治すことを主眼にして練習していたが、次の日からはもう一度すべてを基本から見直すことにして、教本を読み直し、一つ一つの動作を初心者のように確認しながら弓を引いた。うまくいかない部分については綾乃や他の部員、これまで無意識に避けていた本多先輩のところへわざわざ行つて質問してみたりもした。ひどく叱ったことなど覚えていないかのような態度で、丁寧^{ていねい}に色々と教えてくれる。どの教本でも見たことのない、棚橋先生も教えてくれなかったような細かい技術的な説明もしてくれた。凜への説明を他の部員も近寄つてきて興味深そうに耳を傾ける。

特に目に見える成果など出なかったが、これまでより遥かに正しい道を歩んでいるような気がした。

(我孫子武丸「凜の弦音」による)

〔注〕

強弓——弓の張りが強く、引くのに強い力を必要とする弓。

棚橋先生——凜が中学一年からずっと弓道の指導を受けてきて、信頼を寄せる先生。

弦音——矢を放つとき、弓の弦が鳴る音。

綾乃——凜と中学時代から仲のいい、弓道部の友人。

早気——的を狙うときに矢をすぐに離してしまうこと。

〔問1〕 本文について説明したものと、最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 現在形のみを用いた文章の中に過去の凜の回想を差し挟むことで、現在の出来事の中に過去の出来事が折りたたまれた形になっている。

イ 「……」の記号は凜と本多陽子と綾乃の会話文に「――」の記号は凜と本多陽子との会話文に用いられ、三人の会話を際立たせている。

ウ 本多陽子や綾乃の言葉を取り入れて凜以外の登場人物の内面にも踏み込んでいくことで、登場人物の気持ちが偏りなく描かれている。

エ 凜の視点に寄り添いながら弓道部を中心とした出来事を描くとともに、凜の心の中の言葉を会話文以外の文章の中にも織り込んでいる。

〔問2〕⁽¹⁾ 眉をひそめる とあるが、この場面での「眉をひそめる」の意味として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 心を痛めているという気持ちを出すこと。

イ 快く思っていないという気持ちを出すこと。

ウ はねかえそうとする気持ちを出すこと。

エ 心の中で悩んでいる気持ちを出すこと。

〔問3〕⁽²⁾ 凜が素直に答えると、部長はやれやれという様子で横を向いて舌打ちをする。とあるが、この表現から読み取れる本多陽子の様子として最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 一年生ながら自分より先に参段を受けた凜が、自分以上に他の部員

から人望を集めるようになるのではないかと動揺する様子。

イ 部長として部をまとめ、引っ張っていく立場にある自分に反発して、自分勝手な行動を正当化する凜をたしなめようとする様子。

ウ 棚橋先生の好意に甘えて、一人だけで先生の道場に通っていた凜の配慮に欠けた行動を本人から確認して、失望を隠せない様子。

エ 思いもしない質問をぶつけて凜を困惑させ、勝手な行動は許さないという部長としての強い姿勢を、他の部員に示そうとする様子。

[問4] ⁽³⁾色々と言い訳したいことはあった。とあるが、凜が「色々と
言い訳したいこと」のなかで適切でないものは、次のうちではど
れか。

ア 週に一度土曜日だけでも、柵橋先生の道場に行くのは、学校での指導
を辞めてしまった先生の様子を見に行くことになると思っていたこと。

イ 柵橋先生から自宅の道場を「好きに使ってね。」と言われた時にも、
一度は辞退したのに、先生から再度勧められたので通っていたこと。

ウ 柵橋先生の道場を訪ねると、先生は嬉しそうに迎えてくれて、「時々
弦音を聞かないと寂しいから。」と先生自身も言っていたということ。

エ 他の部員に先んじて参段の審査を受けたのだから、柵橋先生の体調
にかかわらず、自分には特別な指導や練習があつて当然だということ。

[問5] ⁽⁴⁾凜がそう言うと、綾乃は目を剥いた。とあるが、この表現から
読み取れる綾乃の様子として最も適切なものは、次のうちではど
れか。

ア 凜が本多陽子から強い口調で注意を受けっていると感じ、凜もそのこ
とを理不尽に感じていると思っていたのに、凜から思ってもいない言
葉が返ってきたので驚いている様子。

イ 柵橋先生の道場に一人で通っていたことには、凜なりの事情があつ
たと考えているので、本多陽子の強い口調に押されて謝ってしまった
凜から本心を聞き出そうとする様子。

ウ 本多陽子の態度にうんざりしていたので、凜が強い調子で責められ
ている機会を捉えて本多陽子に直接その気持ちを伝えようとしたの
に、凜が同調しなかったので納得がいかない様子。

エ 本多陽子から一方的に責められている凜に同情して本多陽子のきつ
い言い方をとがめているのに、友人としての自分の思いやりに気付か
ず、逆に本多陽子をかばう凜がっかりする様子。

〔問6〕 本文中の二重傍線の箇所は、凜が本多陽子に謝っている表現であるが、謝っているのは、凜がそれまで自分では気付かなかったことに気付いたからだと考えられる。凜は自分についてどのようなことに気付いたのか。解答欄の「　　ことに気付いた。」に続く形で七十字以内で書け。なお、や。や「などもそれぞれ一字と数えよ。

〔問7〕 本多陽子との話の後、凜にはどのような行動の変化が見られたか。七十字以内で書け。なお、や。や「などもそれぞれ一字と数えよ。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

マメコガネは、光沢のある茶色の背中（羽）が、やはりメタリックの緑色に縁取られた、大人の爪ほどのコガネムシです。何より魅惑的なのはそのポーズで、前から三対目の脚は、大きく上に持ち上げられたり、横にまっすぐ突き出されたりしているのです。前二対の脚で、葉や、他のマメコガネの背中にしがみつきながら、後ろの脚はしっかりと、華麗なポーズをキメている。

* マメコガネは出初式でざしきをやっているに違いありません。江戸の火消しは、いなせさと度胸を示すパフォーマンズ、それに訓練を兼ね備えた形で、出初式をやっていたのでしよう。何よりそれは人に見せるものだったはずです。マメコガネの出初式は、誰も見るものがない。抜けるような青空のもと、暴力的な緑の繁茂の上で、誰に見せるでもなく、いつまでも自慢のポーズをキメ続けている。いや私だけが、それをじっと見ていたのです。出初式を真似まねするマメコガネ、だからそれはいつも、マネコガネだったのです。

さて、世界に対する対処の仕方は、三つに大別されるでしょう。人工知能の対処の仕方、自然知能の対処の仕方、天然知能の対処の仕方です。これを、身近な虫や魚に対する向き合い方において考えてみます。

第一に、人工知能です。食べるためとか、害虫として駆除するとか、自分にとっての用途、評価が明確に規定され、その上で対処するという向き合い方が、人工知能の対処に相当します。それは一昔前の日本ではよく見られた風景の一部であり、むしろ動物的な気さえして、未来的な

人工知能とはソリが合わないようにも思えます。しかし私はこれを、人工知能の思考様式に対応させたいと思います。なぜならそれは、自分にとって有益か有害かを決め、その評価のみで自分の世界に帰属させるか（食べて取り込む、益虫として利用するか）、有害なものとして排除するか（有毒なものを無視する、害虫として駆除するか）、いずれかに決め、自分にとっての世界を広げるものだからです。

第二に、自然知能です。ここでは、自然科学が規定する知能という意味で、自然知能という言葉を使います。自然知能という言い方は、様々ありますが、本書で言う自然知能とは、自然科学的思考一般の事です。昆虫少年の思考様式が、自然知能の対処の典型となります。自然知能に従う昆虫少年は、世界を理解するために、^{*}博物学的、^{*}分類学的興味から虫や魚に対処していきます。学名は無理としても、正式な和名を覚え、捕虫網を持って昆虫採集し、毒瓶で虫を殺して標本を作る。こうして世界に対する知識を蓄積していく。これが自然知能です。

第三に天然知能です。第一の人工知能が「自分にとっての」知識世界を構築する対処、第二の自然知能が「世界にとっての」知識世界を構築する対処であったのに対し、天然知能はただ世界を、受け容れるだけです。誰にとつてのものでもなく、知識ですらない。或る場合には評価をすることがあっても、別の場合には一切無意味であるものも受け容れる。評価軸が定まっておらず、場当たり的、恣意的で、その都度知覚したり、知覚しなかったり。これが天然知能です。

⁽¹⁾ 子供の頃、ドブ川でナマズを捕っていた私は、天然知能でした。近所には里山が広がり、草深い土手に区切られた用水路で、フナやドジョウ

を捕っていた私は、食べるためでも、博物学的興味からでもなく、ただ魚を捕り、しばらく飼っては、近くの沼に逃しに行っていました。その地方では梅雨の終わりに大雨が降り、近隣の沼に棲息する大型のナマズ、ライギョ、五十センチにはなるだろう、コイが、近所の、江戸時代に作られた堀に流されてきました。

大雨の翌日は決まって快晴で、水の引いた堀の淀みに、ナマズやコイが、背びれを見せながら潜んでいました。それを小さなタモ網で掬い上げることの無上の喜び。堀の上から冷やかす大人の声も気にせず、当時は自転車さえ捨てられていた堀の中で、ただ魚を捕り続けました。帰宅するとタライに魚を放し、その背中をひたすら眺めました。

自然知能は、博物学的に魚を同定しようとしますから、ナマズやコイのイメージは常に図鑑に示されたような、横から見たイメージになります。人工知能では、自らの経験が作り出した用途でイメージが決まります。食べ物として利用するとき、ナマズやコイは三枚おろしや切り身であり、インテリアとして利用するときには、水槽の中で水草と一体になったイメージとなり、その都度、それ以上でもそれ以下でもないイメージが確定します。

天然知能が見るナマズやコイのイメージは、水面から見る影であり背中です。それは常になら見た黒々とした流線型で、奥の暗がりからフツと現れ、また奥へと消えて行つては、天然知能を興奮させます。天然知能は、自分には見えない暗がり、どうなっているのかわかるはずもない向こう側からやってくるもの、向こう側へ行くものに興奮するのです。魚が向こう側との接点であるとき、自然の中で生きていく姿を見るしか

ない。すなわち、私たちは、水中の魚を、上から見るとは、見えないのです。

向こう側は、他人に聞いても誰にもわかりません。客観的に意味のないものです。だから自然知能は無視します。自然知能は、問題や謎として知覚されたものだけに興奮するのです。人工知能は、知覚できたデータだけを問題にしますから、まずはデータを覚えてくれ、と言うでしょう。見えないものに興奮するのは、天然知能だけの特権なのです。

(2) マメコガネに対して三つの知能はどう反応するでしょうか。人工知能は、この甲虫がマメコガネやブドウに対する害虫となり得るものの、日本では海外ほど暴走しない、だから自分の畑もさほど荒らさない、その程度の害虫と判断するでしょう。もちろん、それは一つの人工知能の判断で、別の経験を持った人工知能は、別の判断をするはずで、色の綺麗きれいなものは何でも収集する人工知能なら、マメコガネの羽を自分のコレクションに収めるべき、と判断するでしょう。人工知能に共通するのは、自らの経験によって鍛えあげられた一元的価値観で、全ての知覚されたものを評価するという点です。それは一般的には、自らにとって有益か有害か、という判断に帰着すると考えていいでしょう。

自然知能は、目の前の甲虫がマメコガネであることの確認に躍起になるでしょう。腹部を覆う羽は茶色でメタリックグリーンに縁取られています。頭部と胸部も緑色。腹は焦げ茶色ですが白い毛がたくさん生えています。こういった分類上の基準を満たすか否かいなかで、マメコガネか否か判定されます。目の前の甲虫がマメコガネであったなら、世界に関する知識は再確認されますが、そうでない場合、新種の可能性さえ出てくる。こうしてマメコガネは、世界にとっての知識に寄与する材料となる

のです。

天然知能は、目の前の甲虫を見て、知識としてマメコガネかもしれないと思いつながら、マメコガネが、自分の知らないところからやってきた点に興奮します。マメコガネは、自分の知らないことを担かいできたに違いない。出初式もその一つです。天然知能は、マメコガネと自分の出会いの中に、自分の知らない向こう側から、何かやってくることを感じるのです。

世界の真理としての自然知能、個の経験に依拠よした素早い判断である人工知能。これらに対して、天然知能には、「てんねん」という音の感じからも、論理的ではない、愚直*な感じがありますが、しかし同時に、底抜けに明るい、楽天的な、生きることへの無条件の肯定が感じられます。論理的に評価し、判断する能力としては、低いかもしれない。しかし天然知能は、自分が自分らしくあることを、肯定できる、唯一の知性なのです。

人工知能や自然知能には創造性がなく、天然知能だけが創造性を持つのです。なぜそう言えるのでしょうか。人工知能や自然知能は、知覚したものを自分の世界に取り込み、知覚できないものの存在を許容できません。そこには外部を取り込み、世界を刷新する能力がないのです。天然知能は、知覚できないものの存在を感じ、それを取り込もうと待ち構えている。この意味で天然知能は、自らの世界の成立基盤を変えてしまふのです。

人工知能と人間に、何か題材を決めて絵画を制作させ、一般にアンケートを取ってどちらがいいか選んでもらう。このようにして、創造性を評

価値しようものなら、人工知能はたちどころに、一般の人がいいと感じる絵画の傾向を学習し、それをもって、アンケート調査で勝つ限りでの、人間が描いたよりずっと「創造的な」絵画を描けるでしょう。優秀は、優秀の基準を決めない限り、存在しないのです。逆に決めたら最後、人工知能の一人勝ちです。

このような創造性は、外部から勝手に評価基準を与えた、擬似的創造性に過ぎません。当事者にとっては何の意味もない。⁽³⁾多くの人が投票によって「創造的」と考える作品は、それを制作した当事者にとって、創造的ではないのです。人工知能や自然知能は、だから、創造性を楽しむことができない。

天然知能だけが、「創造を楽しむ」ことができるのです。

(郡司ベギオ幸夫「天然知能」による)

〔注〕 いなせ——粹で威勢がよく、さっぱりとしているさま。

博物学——自然物、つまり動物・植物・鉱物の種類・性質・分布などの記載とその整理分類をする学問。

分類学——生物界を一定の規則に従って、いくつかの段階にまとめて整理し、それらの相互関係や系統分化などを研究する学問。

恣意的——その時々で物事を判断するさま。

同定——生物の分類学上の所属・名称を明らかにすること。

一元的——一つを中心によって世界が統一されているさま。

依拠——よりどころとすること。

愚直——正直すぎて気のきかないこと。

〔問1〕⁽¹⁾子供の頃、ドブ川でナマズを捕っていた私は、天然知能でした。

とあるが、「子供の頃」に「天然知能」であった筆者にとって、「ドブ川のナマズ」は、どのような意味をもった存在だったと述べられているか。本文中から八字で抜き出せ。

〔問2〕 マメコガネに対して三つの知能はどう反応するでしょうか。(2)

あるが、次の①～⑤の反応例はそれぞれ、A人工知能、B自然知能、C天然知能のどの知能の反応だと考えられるか。その組み合わせとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

- ① その甲虫の羽の色や形状を確認し、それがマメコガネであるかどうか確認しようとし、そうでない場合は新種である可能性を検討する。
- ② その甲虫が害虫となるかどうか、害虫となる場合にはどの程度の被害をもたらすか、判定する。
- ③ その甲虫がマメコガネかもしれないと思いながらも、その甲虫が自分の知らないところからやってきたことに興奮する。
- ④ その甲虫が前から三対目の脚を大きく持ち上げている様子を、出初式のポーズをとっているかと思っじつと見つめる。
- ⑤ 色のきれいなものを収集しているのか、その甲虫の羽の色を見て、自分のコレクションに収めるべきか、決定する。

- | | | | | | | |
|---|---|-----|---|-----|---|-------|
| ア | A | ② | B | ① | C | ③と④と⑤ |
| イ | A | ②と⑤ | B | ① | C | ③と④ |
| ウ | A | ①と② | B | ⑤ | C | ③と④ |
| エ | A | ②と⑤ | B | ①と③ | C | ④ |

〔問3〕 多くの人が投票によって「創造的」と考える作品は、それを制作した当事者にとって、創造的ではないのです。とあるが、それはなぜか。次のうちから最も適切なものを選び。(3)

はなぜか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア それまでの自分に全く存在しなかった何かを創ろうとすることが「創造」なのに、投票した数の多さにより「創造的」とされる作品は、多くの人の中に存在しているイメージを外に出して形にしたものではないから。

イ 自分以外の誰にもない個性を自分の中に見出してゆくことが「創造」であるのに、不特定多数の人々の「創造性」を優先させて制作した作品には、制作者がそれまで育んできた個性を反映させることができないから。

ウ アンケート調査の傾向を反映して制作された作品は、世間の多くの人が考える「創造性」を備えてはいるが、その「創造性」はそれを学習した人工知能によって即座に乗り越えられてしまう性質のものだから。

エ ある優劣の基準を設定した上で制作された作品は、その基準がその時代の多くの人々から支持されている間は評価されているが、優劣の基準が変わってしまうと「創造的」な作品とは見なされなくなってしまうから。

〔問4〕 人工知能の特徴を説明したもののうち、最も適切なのは、次のうちではどれか。

- ア 客観的に評価できるものだけを対象とすること。
- イ 評価に先立って問題に対処しようとする事。
- ウ 関心を寄せる対象への評価の基準が多様であること。
- エ 個別の経験によって評価・判断しようとする事。

〔問5〕 人工知能と自然知能との相違点を「知覚」という言葉を用いて、六十五字以内で書け。なお、や。や「などもそれぞれ一字と数えよ。

〔問6〕 天然知能の特徴を説明したもののうち、最も適切なのは、次のうちではどれか。

- ア 創造的であることによって、世界を受け容れたり受け容れなかったりするもの。
- イ 知覚できる場合だけでなく、知覚できない場合にも世界を受け容れようとするもの。
- ウ 知覚できる場合には世界を受け容れ、知覚できない場合には世界を受け容れようとしないもの。
- エ 客観的に意味のある知識だけを受け容れながら、それらの中にも創造性を見出そうとするもの。

〔問7〕 本文の論の展開について説明したもののうち、最も適切なのは、次のうちではどれか。

- ア 筆者の子供時代の経験から話を起こし、その中に三つの知能が既に現れていたと述べ、次いで三つの知能の特質を整理して提示し、三つの知能が今後どのように変化していくかを予測して論を結んでいる。
- イ 筆者の子供時代の経験を導入とし、三つの知能を比較してそれぞれの相違性を明らかにした後、親しみやすい例の中でそれらについての検討を積み重ねること、三つの知能の共通性を明らかにしている。
- ウ 筆者の子供時代の経験から話を起こし、三つの知能がある共通する観点から整理した後、親しみやすい例の中で三つの知能について検討を深めていくことで、筆者の論を読者に理解されやすくしている。
- エ 筆者の子供時代の経験を導入とし、共通の条件を設定して三つの知能の振る舞いを予測した後、その予測を実際に検証するという過程を繰り返しながら、三つの知能の特質を読者に分かりやすく伝えている。

4

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

古典和歌の重要なレトリックの一つに「見立て」*があります。「見立てる」という動詞は「そのものとみなす、なぞらえる」という意味を持ちます。和歌における「見立て」の典型的な例といえるのは、たとえば次のような歌です。

A み吉野の山辺に咲ける桜花雪かとのみぞあやまたれける

きのともり
紀友則（古今集・春上）

訳 吉野山のあたりに咲いている桜の花は、まるで雪かとはかりに見まわがわることだ。

Aは「古今和歌集」の撰者（和歌を編纂した人）の一人である紀友則の歌です。「み吉野の山」は大和国（現在の奈良県）吉野郡一帯の山のこと。「み」は吉野という地名を誉める美称*です。季節は春。吉野山はいま、桜の花ざかりを迎えています。その風景を遠くから眺めて、「吉野山の桜は、まるで真つ白な雪かと錯覚してしまうほどに美しいことだなあ」と感嘆したのがAの歌です。山肌を覆い尽くすかのように咲いている「桜」（これを〔a〕としましょう）の美しさが、そこには存在しない「雪」（これを〔b〕としましょう）にたとえることによって、はっきりと表現されています。このような歌を〔a〕と〔b〕の見立ての歌と呼びます。現代の私たちも、散る桜を雪にたとえた「花吹雪」ということばを持つ

ていますが、このことばの中には、古典和歌以来の美意識が継承されていることがわかります。

「見立て」は比喩の一種ですが、^①aと^②bにあたるものがいずれも、目で見、手で触れることのできる「物」であるところに特徴があります。たとえば「恋する心」のような形のないものを「炎」にたとえるといった表現は、「見立て」の仲間には入りません。「見立て」とは、そこに存在する「物(=a)」のある一面を、存在しない別の「物(=b)」のイメージを持ち出すことによって、^③際立たせる表現技法です。そして^④aと^⑤bとを結びつける鍵となるのは、多くの場合、目で見えた時に似ていること、つまり視覚的な類似です。Aの歌でしたら、「桜」と「雪」とが、「白さ」という色の類似性を鍵として結びつけられています。このようなことを踏まえて「見立て」を定義すると、少し理屈っぽい言い方ですが、次のようになるでしょう。

見立てとは、視覚的な印象を中心とする知覚上の類似に基づいて、
I レトリックである。

この定義の中で「視覚的な印象を中心とする知覚上の類似」という、まわりくどい言い方をしたのは、ごく少数ですが、耳で聴いた時に似ていること、つまり聴覚的な類似を取り上げる歌も存在するからです。古典和歌の中には、たとえば「松風を琴の音と聴く」「紅葉の散る音を雨音と聴く」といった歌があります。現代の私たちには、少しわかりにくい感じ方かもしれません。

ところで、Aの歌の中で「見立て」によって結びつけられた「桜」と「雪」は、本当に似ているのでしょうか。桜は春に地上で花開く植物です。いっぽう雪は気象現象の一つで、季節は冬に属しています。この二つはまったく別のものではありませんか。本当は似ていない^①二つのものを、「白さ」という印象深いたった一つの類似性によって、半ば強引に結びつけてしまう、言い換えれば、それ以外の相違点はすべて捨ててしまう。このような潔い^②ほどのIIとが、「見立て」というレトリックの命です。「見立て」には発見的^③思惟と驚きがともなっています。「見立てる」ことによって、それまで何気なく見ていたものの中から、^④思いがけない本質が立ち現われてきて、世界が変わって感じられるのです。「桜」は「雪」よりもむしろ同じ植物である「梅」に似ていますが、^⑤「桜」を「梅」にたとえても、あまり面白くありませんね。「桜」を「雪」と見なすことによって、それぞれの真つ白な美しさが際立ち、さらには、ことばの力によって「花ざかりの吉野山」を「雪景色」に一変させるという知的な喜びが得られるのです。

詩歌の歴史をたどると、「見立て」はもともと、漢詩文に見られるレトリックでした。たとえば次に挙げるのは、^{*}盛唐の詩人李白の有名な詩の一節です。

B ⁽²⁾ 牀前月光を看る／疑ふらくは是れ地上の霜かと
李白（「静夜思」）

訳は「寝台の前にさしこんだ月光を見つめる、これは地上に降りた霜か

と疑われる」というもの。秋の夜に寢室にさしこんでいる白い月の光を、まるで地上の霜のようだと捉えている、つまり「月光を霜に見立てている」のです。万葉の昔から、日本人は漢詩や漢文から多くのものを学び取って、自分たちの文学を形成してきました。和歌における「見立て」の先駆的な例も「万葉集」の中の男性官人たち、つまり漢詩文に習熟していた人々の歌の中に登場します。奈良時代の歌人である大友旅人は、梅の花をめぐる宴会の席で、

C わが園に梅の花散るひさかたの天あめより雪の流れ来るかも

大友旅人（万葉集・巻五）

という歌を詠よんでいます。「ひさかたの」は「天」にかかる枕詞*まくらごは。訳は「私の家の庭に梅の花が散っている。空から雪が流れてきたのかと思われることだ」となります。「梅」を「雪」に見立てているのです。このような、漢詩文由来の表現と発想を摂取して日本語の歌を豊かなものにしていくというあり方は、和歌の歴史全般に通じるものです。

（鈴木宏子ほか「和歌のルール」による）

〔注〕 レトリック——言葉を巧みに用いて美しく効果的に表現すること、その技術。

美称——ほめる意味をもつ言葉。

思惟しゆい——ものごとを深く論理的に考えること。

盛唐——中国文学史上、唐の時代を四分した第二期。

枕詞まくらごは——和歌で、ある言葉の上につけて、その言葉を飾ったり、調子をととのえたりするために使う言葉。

〔問1〕 本文中の二重傍線を付けた①～④の「ない」の中で同じ働きをしている「ない」は、次の組み合わせのうちではどれか。

ア ①と③

イ ①と④

ウ ②と③

エ ②と④

〔問2〕 空欄Ⅰに入れるのに最も適切なのは、次のうちではどれか。

- ア 実在する事物①を想像上の事物②とみなす
- イ 想像上の事物①を実在する事物②とみなす
- ウ 非実在の事物①を実在する事物②とみなす
- エ 実在する事物①を非実在の事物②とみなす

〔問3〕 空欄Ⅱに入れるのに最も適切なのは、次のうちではどれか。

- ア 臨機応変と折衷
- イ 取捨選択と誇張
- ウ 比較対照と熟考
- エ 試行錯誤と模倣

〔問4〕 「桜」を「梅」にたとえても、あまり面白くありませんね。とあるが、筆者がそのように述べるのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

- ア 桜と梅のように、多くの類似性を持つものを結びつけても、それまで見ていた世界を一変させる意外性は生じないと感じているから。
- イ 桜も梅も古来から取り上げられてきた題材で、ありふれた題材を取り上げても、新たな発想の歌は生まれることがないと感じているから。
- ウ 桜を梅にたとえると、それぞれの花の持つイメージが混じり合ってしまう、どちらでもないイメージが生じてしまうと感じているから。
- エ 桜も梅も何気なく見ているものなので、桜を梅にたとえても、それによって思いがけない相違が現れることがないと感じているから。

〔問5〕 林(2)前(1)月光(3)を看る(4) は、「林前看月光」を書き下し文に改めたものである。傍線部の読み方になるように返り点を付けているのは、次のうちではどれか。

- ア 林前_レ看_二月_一光_一
- イ 林前_レ看_レ月_レ光
- ウ 林前_レ看_二月_一光_一
- エ 林前_レ看_二月_一光_一

〔問6〕 次のア、イ、エの短歌のうち、筆者の考える見立ての歌に最も近いと考えられるものはどれか。

ア おぼえなきアンモナイトが本棚の奥より出で来本は海原

佐佐木幸綱

イ 今しばし麦うごかしてゐる風を追憶を吹く風とおもひし

佐藤佐太郎

ウ 自転車のサドルを高くあげるのが夏をむかえる準備のすべて

穂村弘

エ ガレージヘトラックひとつ入らむと少しためらひ入りて行きたり

齋藤茂吉

〔問7〕 本文の内容と合致するものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 和歌における見立ては漢詩における見立てとほぼ同時代に発生し、ともに影響し合って発達している。

イ Aの歌とCの歌における見立ては自然の事物同士だが、Bの漢詩は自然の事物と人事とを見立てている。

ウ 雪を散る桜にたとえた「花吹雪」ということばには、古典和歌以来の伝統的美意識が継承されている。

エ 和歌の中には、耳で聞いた時に似ているという聴覚的な類似に注目して作られたものも存在している。